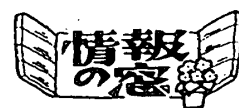


IFORS 2002 参加同行記



若山邦紘 (法政大学) 大山達雄 (政策研究大学院大学) 香田正人 (筑波大学)

1. IFORS とエジンバラ

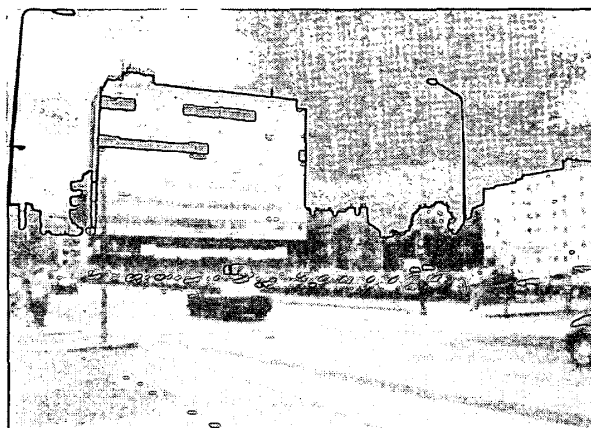
IFORS (International Federation of Operational Research Societies) 2002 は7月8日~12日にイギリスのエジンバラで開催された。実は、IFORS が結成される1959年の2年前の1957年にやはりイギリスのオックスフォードで第1回 OR 世界会議が開催されている。それから45年後、第16回 IFORS 国際会議が英国スコットランドのエジンバラで開催され、45年ぶりの里帰りというわけである。第7回 IFORS は東京・京都で開催されたが、4半世紀以上も前のことになる。月日の経つのが早いことを痛切に感じた。東西の冷戦時代には IFORS 国際会議も冷戦を反映した発言が総会などの会議で盛んになされたものである。ややスケールは小さいが、APORS の結成前夜はそれに似た光景が見られたのである。しかし、現在は IFORS の会議中に政治的な発言や人種偏見などに関連した話題はすっかり影をひそめている。

エジンバラは人口60万人の都市で、エリザベス女王の宝冠が飾ってあるエジンバラ城を取り囲む小さな市である。建物はみな中世の石造りが多い。ロンドンと比べるとすごい田舎に来てしまったというのが第一印象であるが、中身はなかなか親しみやすく、到着の翌日はすでに田舎という感覚はなくなってしまっていた。町の中心は観光客も多いためとても賑やかで、レストランも多様で、聞かされていたほど悪くない。いい嗅覚を持っていれば、かなりおいしいものが食べられる。

IFORS の会場となるエジンバラ大学はエジンバラ城の東南に位置する。城の入り口から歩いて10分程度の近さである。市内を2階建てのバスが縦横無尽に走っているので、どこにでも連れて行ってもらえる。ただ、プリンセス通り界限以外は道路が碁盤の目のようにはないので、よそ者にわかりにくい。

大学は町の中にあるので、それほど広い敷地の中にあるわけではない。古い建物、新しい建物が混在している。発表会場はそれらのうちの三つのビルに分散し

て運営されていた。大会本部事務局は写真の8階建てのビルの中におかれ、参加登録などもここで行われた。

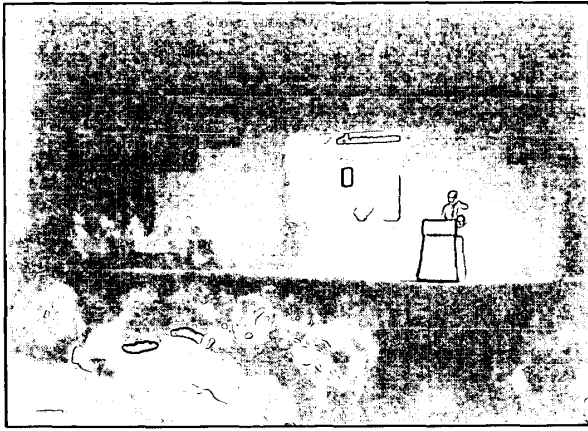


2. IFORS 2002 開催

開会式と特別講演は大学に近い劇場を利用して開催された。この時期はちょうど卒業式が学部ごとに連日行われて、この劇場を使う学部もあり、両親がガウンをまとう自分たちの息子や娘と一緒に写真をとる姿に出会った。

今回の IFORS 2002 は、会議のメインテーマを“グローバル化、ネットワーク化された世界経済の中の OR (OR in a globalised, networked world economy)”として、世界63カ国から1806名の著者による1067件の発表申込みという、これまでの IFORS 大会の中でも最大の参加申込み、発表件数という記録のもとで開催された。国別参加人数としては、英国の320名を最高に、米国からの289名に続いて、わが国からの89名は上から3番目で、あとはカナダ、イタリア、ポルトガル、スペイン、ブラジル、中国、フランスなどから、それぞれ60名以上の参加申込みがあるという状況であった。

会議はプログラム委員長である Professor Ben Lev (University of Michigan, USA)、そして現 IFORS 会長の Professor Paolo Toth (University of Bologna, Italy) の挨拶講演から始まった。Professor Ben



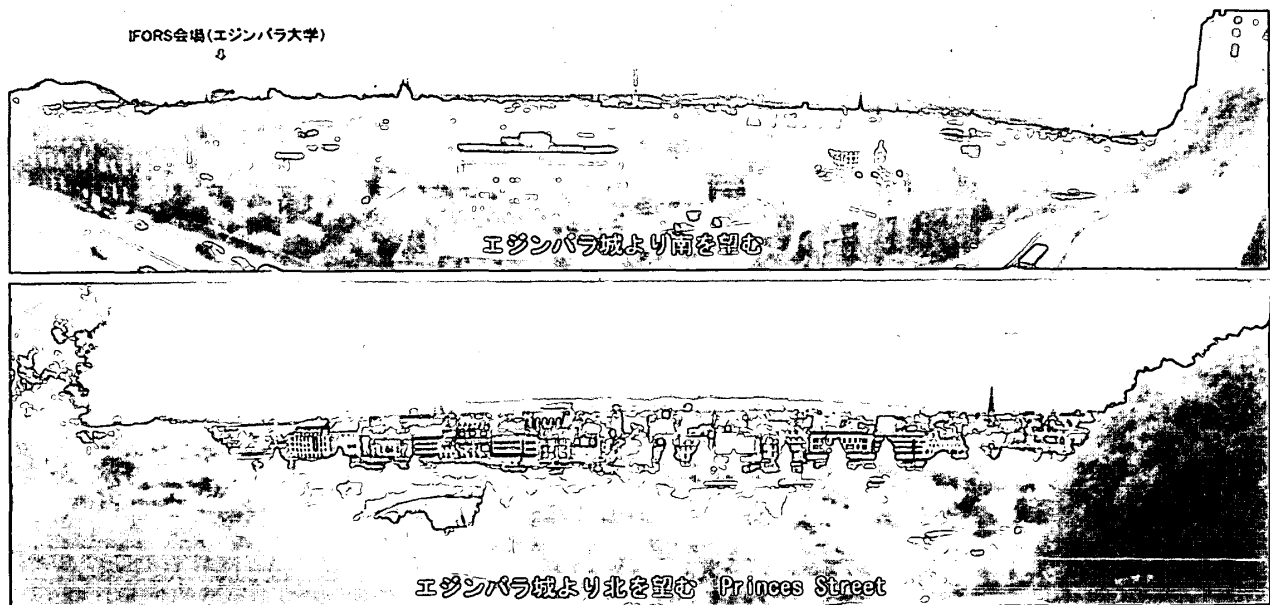
Levによると、さすがネットワーク化された時代の国際学会らしく、彼自身、過去2年間に今回のIFORS 2002関連で約1万通のe-mailを送り、またほぼ同数のe-mailを受け取り、そして今回のIFORS 2002 Web siteには、ほぼ4万件のヒットがあったと述べていた。まさに昨今の国際学会の開催にあたっては、e-mailは必須の通信手段になっているといえよう。

今回のIFORS 2002では、1067件の発表を44のクラスタに分け、セッション数は総計372件で内訳は招待セッション235件、発表セッション137件となっている。クラスタは在来型の数理計画法、決定理論、信頼性、DEA関連等の理論、手法のものに加えて、社会問題、環境、林業、金融ファイナンス、教育、通信、輸送、自動車、軍事、福祉、といった一般的なORの応用諸分野が広くカバーされていた。また電力自由化、サプライチェーン、などのタイムリーな特集話題についても多くの参加発表があり、かなり多くの聴衆を集

めていたようである。

3. IFORS と APORS

今回のIFORS 2002では、これも恒例のことであるが、会議開催中にIFORS各国代表からなる総会、そして日本を含むアジア地区のOR学会連合組織であるAPORS理事会が開催された。各国代表総会では、会長報告として、IFORSの財政収入の約2/3はIAOR等の出版、また約25%がメンバー会費収入によっており、全体として健全な状態にあることが述べられた。またIFORSとしては、今後さらにIT化を推進し、ウェブページをデータベースとして充実する方向が示され、IAORなどのオンライン化と各種e-publicationを考慮中であると述べられた。IFORSの定款改訂の予定として、IFORS Representativeの呼称をBoard memberとすること、メール投票を行い、重要な案件については6-month Ballotと2/3 majorityルール、その他の案件に対しては3-month BallotとSimple majorityルールを適用することが準備中である旨、報告された。なおこれらの改訂についての意見は、2002年12月31日まで受け付けることも報告された。次回のIFORS 2005は、ハワイ（オアフ島）で開催することを決定したが、その次のIFORS 2008に関しては、すでにブラジルがホストに立候補しているが、2002年12月31日まで開催立候補の受け付けをすることが決定された。また次期2004~2006年のIFORS会長候補には、候補者選考委員会によってMIT (North America Region) のTom Magnantiが指名された。また同時期の副会長候補としては、や

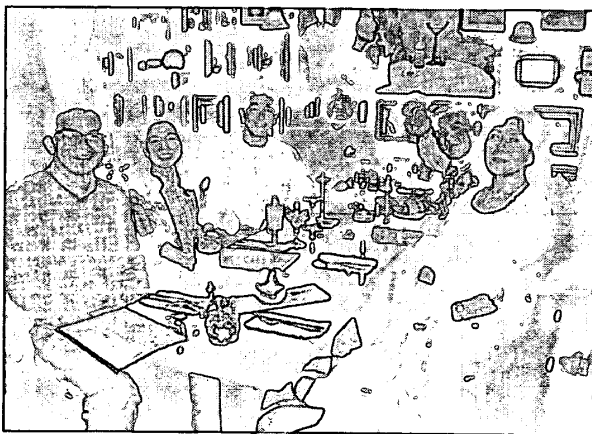


はり候補者選考委員会によって South Africa (EURO のメンバー国) の Theo Stewart が指名された。

APORS 理事会では、現会長 S. P. Mukherjee (University of Calcutta, India) を中心にアジア地区各国 OR 学会間の交流を積極的に行うために、各国内学会への他国学会からの招待等に努めること、そして 2003 年 12 月の APORS 2003 (New Delhi, India) を成功させるべく努力すること、特に日本からの参加者として 100 名近くが期待されていること、などが話し合われた。

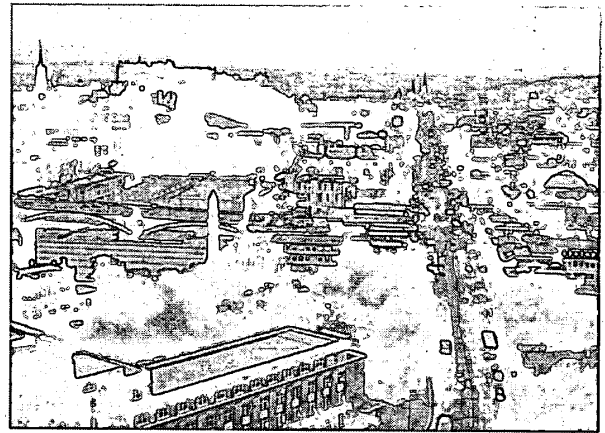
4. エジンバラ市内観光

エジンバラは観光都市である。われわれは 7 月 7 日の夕刻にエジンバラに到着した。例によって、すぐさま IFORS 開催地の徘徊が始まる。とりあえずメインストリートであるプリンセス通りを目指して数名で歩き出す。イギリスに来たのだから、まずはよさそうなパブを見つけよう。どこの街でも表通りから一本裏通りあたりが高くなくていい店があるものだ。いつものことながら、入ったパブは大当たりであった。アルバイトのウェイトレスはルイジアナから来ているアメリカ娘で堅苦しくなくてよい。明るい性格で、スコットランドの地ビールを楽しむわれわれの雰囲気盛り上げてくれた。さすがに本場のビール、という印象を持ったことはいうまでもない。



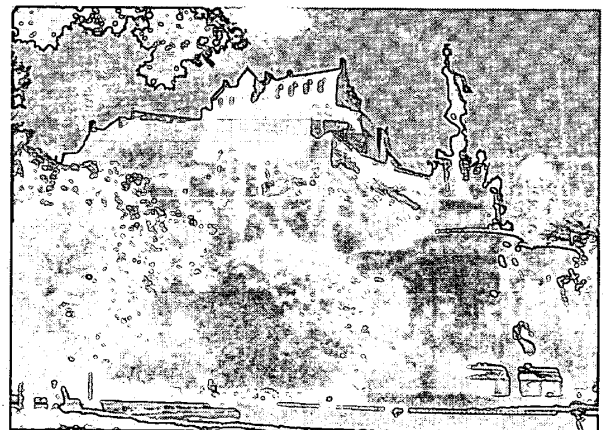
OR 学会の IFORS 代表団ツアーで用意されたホテルはエジンバラ市内では西側にある Edinburgh Hilton Hotel Grosvenor であった。繁華街からは少し離れているので静かな場所にある。ホテルの部屋はよその国と比べると手狭に感じるし、ベッドが小さなシングルである。もちろん冷房などはない。必要がな

いのである。ここから会場まで歩くと 30~40 分かかる。毎日、歩いて会場まで通った人がいる。いわずと知れた健脚の持ち主、1 日 2 万歩と豪語する筑波大の K 先生である。



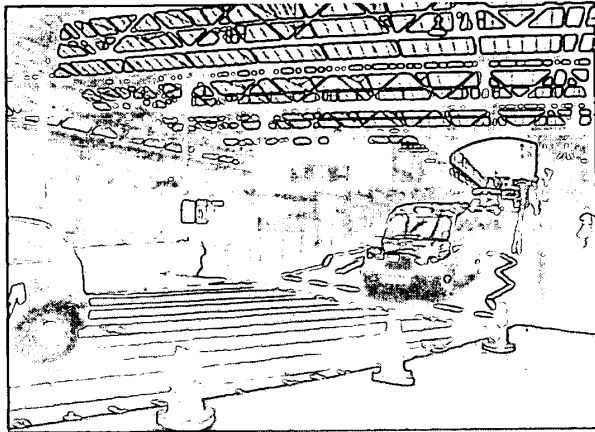
エジンバラの目玉はエジンバラ城である。城は大きな溶岩の固まりである岩盤の上に建ち、四方を見渡す威容を誇っている。中央左手の小高いところがエジンバラ城である。まっすぐの通りがプリンセス通りである。エジンバラ城の真下、北側に鉄道が走っている。線路をはさんで市民の憩いの場となる公園がある。

この真っ青な空を見ると、これがイギリスかスコットランドかと思うが、30 分後にはサーッと雨が降ってくるかもしれない。空港からホテルまでバスで送ってくれたガイドのおばさんは「傘はいつも持って出かけるように」と言ってくれた。幸いスコットランドで傘がないと困るような雨には出会わずにすんだ。



プリンセス通りではバグパイプのストリート・ミュージシャンがスコットランド民謡を演奏している。チップ 1 ポンドはずんだら、顔をこちらに向けて吹いてくれた。愛想のいいバグパイプ吹きであった。

これはエジンバラ駅の構内である。タクシーが入ってきて、ホームから出るとすぐタクシーに乗ることができる。駅のホームの脇までタクシーが入ってくるのはイギリスでは当たり前なのだそうだ。

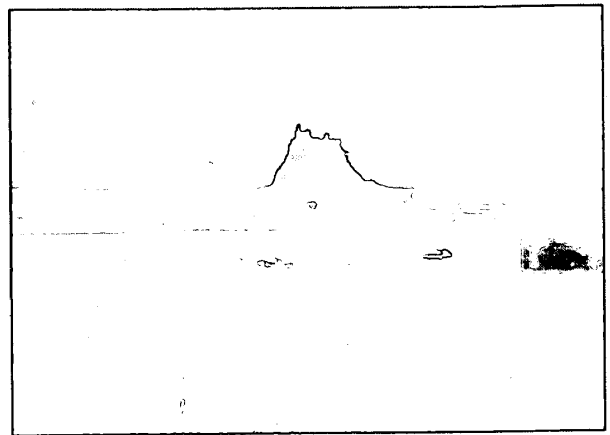


5. IFORS Excursion

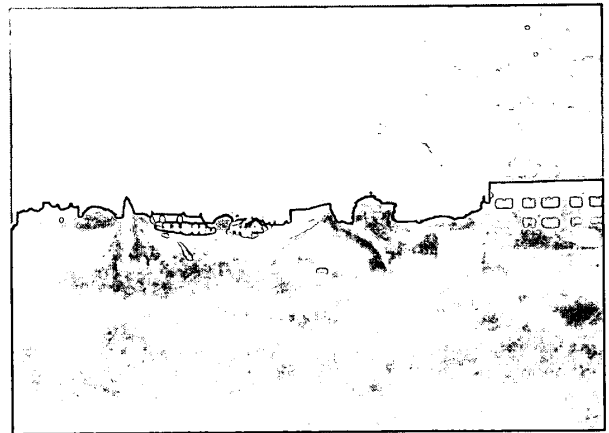
エジンバラといえばゴルフの発祥地をまず思い浮かべる人も多いであろう。IFORS Excursionと呼ばれる水曜日に行われる恒例の遠足の目的地にセント・アンドリュースのオールドコースが組み込まれていた。IFORSが終了して何日か後に今年の実英オープンゴルフはエジンバラのミュアフィールド・ゴルフ・リンクスで開催されている。スコットランドの人たちに言わせると、ちょっと昔は、イングランドではゴルフなどやっていなかったのだそうだ。

IFORSに参加して誰しもが楽しみにしているのは水曜日の遠足である。バンクーバーでは何両編成かの貸切列車で「木こりのショー」を見に行った。エジンバラでは四つのコースが設定されていて、あらかじめ自分の参加したいコースを選ぶものであった。筆者らの一人は現地で登録をしたので、もう選択の余地はない。余っているところに連れて行かれるだけである。しかし、思いもしなかった遠足を満喫することができた。

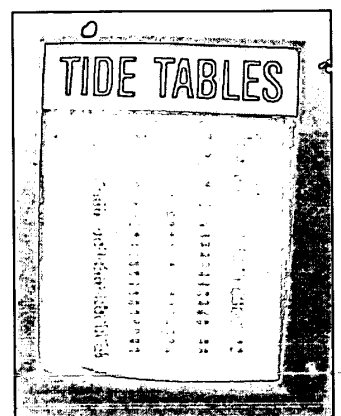
エジンバラから東南に走り、スコットランドの海岸線に出て、南に下る。やがてツイード川 (Tweed River) を渡ると、そこはイングランドとなる。



その先に Holy Island という面積はかなり広いが標高は何メートルかしかない平べったい島がある。本土 (main land) と島の間には橋などない。引き潮の時には地続きになるからである。この島には中世の村 Lindesfarne がある。そこから半マイル先の島の突端に小高い岩山があり、そこに小さな城がある。Lindesfarne Castle という。現在は国に管理されているが、TIME 誌のオーナーが個人所有していた時代があるという。

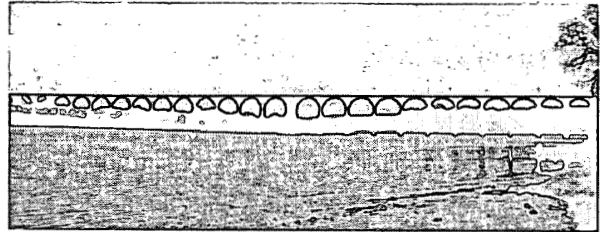
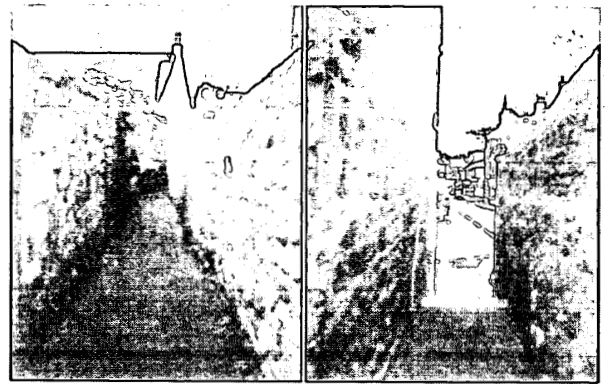
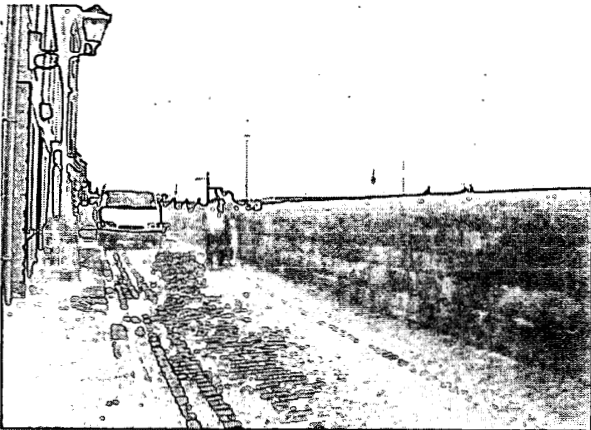


古い漁船を伏せて扉をつければ、倉庫くらいにはなる。なかなかの知恵者がいるものだ。進駐軍のかまぼこ兵舎を思い出す。かまぼこ兵舎は鉄板の波板で作られていたので、暑さ寒さにはきわめて弱い。その点では船は木製なのでより快適なはずである。観光バスの駐車場には潮の干満の時刻表な



るものがある。バスの運転手は、よく見ておかないと帰れなくなる。われわれは海草が転がる道路を走って無事にメインランドに戻ることができた。

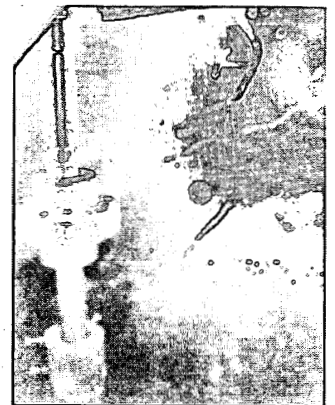
ツイード川の河口に Berwick upon Tweed という城壁に囲まれた古い町がある。むかし北方のバイキングなどの攻撃から町を守るために造られたものである。Berwick Ramparts と呼ぶ。写真はツイード川に面した壁である。



海側へ回ってみると、やはり塁壁が町を囲んでいた。「なるほど、乱暴な異民族はお断りの長城と同じだ」とシャッターを押した。この芝の丘の右側は海である。



中を流れているのだが、昔はこの川の水力でタービンを回してタータンチェックの織物を織っていたのである。そのタービンが今でも残されていて、実際に回して見せてくれる。「残り物には福がある」ということわざ通り、筆者が乗せられたバスは想像もしなかったような素晴らしい場所に連れて行ってくれた。



6. IFORS Banquet と Afternoon Tea

木曜日の晩はバンケットがあることに決まっている。参加者、同伴者が一堂に会しての宴会である。1000人を超す大勢の参加者をどこで食事をさせるのか、エジンバラのような田舎の都市にそんな施設があるのだろうかと思ってしまう。

英国はラグビーの国である。エジンバラにはスコットランド・ナショナルチームのスタジアムがある。そこで IFORS Banquet をやろうというのである。まずはわれわれはスタジアムのグランドへ通され、そこで食前酒が配られる。グランドなら何千人でも大丈夫だ。

スタジアムの観客席の下には、広い空間がある。われわれすべてを収容できる大きなホールがあった。ただ、そのような場所なので長細い部屋である。知人を

また、この壁の内側の家々は、やはり強固な石積み。の壁で囲まれている。まだ人々は壁の中で暮らしているのである。スコットランド人は日本人のように気が短くはないようである。

ツイード川にかかる鉄道の石橋は相当古いものであると思われるが、まだ、その上を列車が走っていた。この川がイングランドとスコットランドの境となっている。エジンバラに帰る道筋で Locharron Wool Centre に立ち寄った。やはり、小さな川が町の真ん



探すには隅から隅へと歩き回らなくてはならない。

ラグビーの試合があるときは、観客たちの食事をここで食べさせるのであろうか。そうだとすれば食事をしてからラグビー観戦というわけだ。

日本には「午後の紅茶」というのがある。キンピールの山本という男による命名でヒット商品であった。彼は筆者らの一人の同期生である。

こちらの「午後の紅茶」はTea Timeで出される紅茶とサンドイッチ・ケーキ・クッキーのセットをいう。午後3時にならないと注文できない。人数分を注文すると食べきれないほどお菓子があふれる。そこで、6人で2人分Afternoon Teaを注文し、残りはTeaだけにした。これはOR屋の賢いやり方である。それで、ゆったりとした気分でおやつを楽しむことができた。Afternoon Teaは一人前で14ポンド以上もするのだから安い。



この写真に写っているIFORSの常連たちの満足げな顔がわかるであろう。この日はIFORS最終日、午後3時にエジンバラでもっとも立派そうに見えるCaledonian Hilton Hotelで待ち合わせて贅沢な「英国流午後の紅茶」を楽しんでいるところである。明日

は朝早くエジンバラを発つのだ。

7. おわりに

今回のIFORS 2002に関しては、EURO地域メンバー諸国から、会議登録費が余りに高額(約450ポンド)であることがクレームとして出された。それに比して、歓迎レセプションやイブニング・イベントの内容がお粗末で、コップの水しか用意されていなかったり、場所が狭かったり、概して参加者の評判が悪かった。また、レディス・プログラムなど同伴者向けの特別のプログラムやイベントなども皆無であった。クレームの趣旨は、高額登録費のため若手研究者やアフリカなどの発展途上国からの参加が困難となり、機会喪失になるという点にあった。そのためか、これまでで最大の1000人以上の参加があったと報告されたが、中国からの参加者が比較的少数であったとの印象が残った。登録費については次期のIFORS 2005開催に当たって検討することになった。

主催者であるイギリスのOR学会は、企業などから寄付を集めることなどしていなかったのであろう。おもてだてスポンサーの名称などが公表されていないことから、そのように推察できる。

日本で国際会議を開催するときは、参加者の負担をなるべく軽減するために、組織委員会は寄付金集めに大変な努力を払ってきた。それによって、潤いのある大会運営ができるというものである。日本の場合、物価も諸外国より高いので、参加登録費は一人にかかる費用の半額程度に参加費を設定してきたものと思っている。

それにもかかわらず1000人を超す参加者があったことはIFORS万歳なのだろう。次回IFORS 2005の開催地ハワイは、ヨーロッパから遠い、ということでEURO会員グループの間で不評ともいわれている。また、ハワイに近いわが国OR学会員への勧誘が増すかも知れない。わが国が最も近くの海外国となる次回IFORS大会も成功を願いたいものである。

今回のIFORSでの皆さんへのお土産は“OR inside”というコピーである。どこかで見たような気がする。“OR inside”が巷で流行ることにでもなれば、うれしい限りである。OR学会の合言葉にしよう。

